【会長講演】
本会の趣旨に関する思い出話
日本歯科大学長 中原 実

12. 歯痛薬の歴史について（1）
日本歯大・新潟 本間 邦則

江戸時代における歯科医療の中で、ときに歯痛にたいする処置について考察したいと思う。歯痛にはいわゆる鎮痛療法がどのようにおこなわれたかについて、古書に記載してある処方集などを基にして考察をこころみた。「広恵齋急法」（1789）には、口腔出血にたいする処置で、拔歯手術の後処置にたいして知ることができるが、鎮痛療法には記載がみられない。「袖珍医便」（1690）、「袖珍仙方」（1714）などには、鎮痛療法としての薬剤の処方がみられる。これらの処方集から得たことについて、現代の鎮痛療法の進歩とあわせて考察したいと思う。

13. 打牙児伝に於ける欠歯の風習について
東京 戸出 一郎

打牙児伝は伝の1種である。伝伝は中国西南部の貴州・雲南・広西の山岳地帯に住む民族で、焼畑農業と狩猟によって生計を立てる、伝伝が如何なる民族に属するかは体質や文化の上から明かにし得るが言語的には漢語系あるいは漢泰語系に属するものである。

文献によれば伝伝は10余種の部族に分類されるが、打牙児伝はその中の1部族で、その名が示すように欠歯の風習を持っている。また、打牙児伝は中国大陆において近代まで欠歯の風習を持っていった殆ど唯一の部族である。

ここにこの部族の由来と欠歯の風習について述べ、併せて考査を加えるつもりである。

14. 「日本民話の医にまつわる模索」
津島歯科総合研究所 岡田 治夫

古くから、日本民族の間で、語り継がれてきた民話の中で、比較的に「医」に係わると解釈されるものについて分類検討した。

それ、民話とは、その地域住民に古くから語り継がれてきた、持ち味に満ち溢るものであり、人を喜し、もっても深い関係をもつものである。そこで、「医」がどんな関係にあるかを知ることは極めて重要である。とくに、「医」にまつわるものを追究したところ、若干の興味を得たので報告する。

15. 歯木考
大阪 杉本 茂春

古代インドには、「噛歯木」の習慣が広く行われていたのは、大蔵経に「噛歯木」の句が多くみられることでも知られる。

その意義は、古代インド民族の必要に応じて生じた習慣と考えられる。

その材質は、歯木と漢訳されたインド産薬木マルゴサ（くすのき科）を主とし、金銀製の奢侈的材質も使用された半面、薬木の得られないときには手近の�*_木の枝も適宜使用していたと考えられる。

その形状は、長さ18〜20cmに、木の数種、わが国の煮物類・蒸物類・お茶つま読みがその形状を伝承していると考えられる。

中国では、歯木の代用に篅木を用いて至しとする意をにとって、楊木を用い、楊枝と漢訳したと考えられるが、わが国では、マルゴサの薬効を忠実に伝承して、クロモチ（くすのき科）を探しあてて代用したものと思う。